

「僕は、パスを出す役なの、それをフオワードのたちちゃんが決めるんだ。」

「パスを出す役なんだ、それで？」

「なかなかゴールは難しいんだけど、だから、決まった時は最高なんだ！」

「そうなんだ。なんかかっこいいね。明日の試合楽しみだな。」

「それで誠は大人になったら、どんなことをしたい？」

「えーとね・・・」

時間を忘れて、和美と誠は、まだ見ぬ未来の絵を一緒に描いていた。

「ねえ、お母さん。明日の試合、お父さん見に来てくれるかなあ」

「きつと、きてくれるわよ。この前、誠に鈍くなったって言われたの、けっこうショックだったみたいよ。」

「お父さん、負けず嫌いなところあるでしょ。今度、マラソンに挑戦するって言ってたわよ。」

「誠、オムライスのお皿出して。」

「お母さん。コップとスプーンもでしょ。」

「ありがとう。それもお願いね。誠。やるじゃない。いいだんなさんになるわよ。」

「ただいま」

「あっ！お姉ちゃんだ。お母さん。お姉ちゃん帰ってきたよ。」

「ねえねえ、お母さん。見てみて」

そうやって、由紀はテスト用紙を胸の前でちらつかせた。

少しずつ、岡本家の食卓が彩りを添えてきていた。

一段目

星野とのオリエンテーションがあつてから、わずかな時間の間にいくつもの流れが方向を変えて、動き出していた。初めてのコーチングセッションの予定の日、誰もいない会議室から和美は星野コーチに電話をかけた。会議室の外の窓には、すっかり緑が色を濃くして、木立が地面に影を作っていた。梅雨空が薄らいで、空色の青に夏の白い雲が見え始めていた。

「こんにちは、星野です。」

「あつ、岡本です。よろしくお願いします。」

ちよつとだけ、緊張が和美を包んで一瞬で消えた。

「こちらこそ、よろしくお願いします。」

「岡本さんと一緒にプロジェクトを成功させるの、とっても楽しみですよ。」

「あれ?・・・」

「岡本さん、なんか、この前と声が違いますね。」

「何かいいことありました。」

「えっ、そうですか。鋭いですね。」

「よかつたら、この前のオリエンテーションから今日までのことで、今感じていることや、気づいたこと、なんでもいいので、教えてくれませんか?」

星野が目の前プレゼントを早く空けたいのを待ちわびている子どものように、本当に楽しみにしているのが伝わってくる。

「実は、あれから色々なことがあって、何から話していいか・・・、今回のテーマのプロジェクトのことも色々あったんですが、子どものことでちよつとあつて・・・」

「岡本さん、僕たちコーチは、弁護士さんのように守秘義務を負ってます。」

「ここでの会話は、会社の上司にも誰にも漏れませので、安心して話してくださいね。」

「実は、先日子どもが万引きをして、補導されたんです。こんなこと初めてで・・・」

和美は、由紀の万引きのこと。

誠と真也とのこと。

由紀と久しぶりにゆつくり話が出来たこと。

真也とゆつくり話したこと。

家族の話を聞いたこと。

家族に話を聞いてもらったこと。

とめどなく星野に話していた。

星野は、その時の和美の心の琴線に、和音を重ねるように息さえ合わせて聞いてくれた。

そこへは、評価や忠告や批判、アドバイスは何もなかった。

和美は、ただ聞かれるだけで一枚一枚よろいを脱いで軽くなるような感覚を抱いた。

人は、こんなになだ聞いて欲しいんだ。

聞かれることで自分が満たされていく、逆に聞くことがどれだけ深い愛情なのかを和美はかみ締めていた。

「色々あったんですね。」

「不思議とコーチをつけて、人生に変化を起こそうとすると、多くのクライアントさんに、同じような大きな出来事が起こるんですよ。」

ひとしきり、家族での出来事を話した後に、星野コーチが寄り添うように訊いてきた。

「岡本さん、素敵な体験でしたね。人は体験を通じて一番成長すると言われていました。」「岡本さんは今回の体験から、どんなことを学んだんでしょうか？」

和美は、星野コーチから問われて、深く自分の中の答えを探す思考の旅に出た。

「私が学んだことは何？」

「私は、今、何を考えているの？」

「私は、何を感じたの？」

「今、私は、ほんとに何がしたいと思っているの？」

星野コーチの問いが、一つのきっかけとなって、自分が自分にたくさん問いを問いかけていた。

和美は、本当は家族が大切といいながら、行動は後回しにしていたこと。

無意識で、子どもに甘えて、子どもに辛い思いをさせていたこと。

家族は、みんながちゃんと役割を持って助け合っているチームなんだということ。

和美は、自分の言葉に次の言葉を重ねるように、話しながら、気づきながら、自分も知らなかった自分を発見していた。星野が言っていた客観性が、なんとなくわかってきたように思っていた。

自分の中には、こんなに知らなかった自分があるんだと自覚していた。

もっと、もっと、自分の事が知りたいと思った。

自分の答え。

自分の可能性に期待が沸いてきた。

「そうですか・・・たくさんの発見がありましたね。それを是非、今と未来に活かして行きましょね。」

「ところで、宿題あったでしょ。自分の答え、見つかりました？」

「目標を達成して誰を喜ばしたのか？」

和美は、この問いにずっと答えを探していた。

その答えは、考えても出てこなかったのに、今、星野コーチと話しながら確信といえる答えにたどり着いていた。

「星野コーチ、私は、今回のプロジェクトを成功させて、日本中の家族を幸せにしたいんです。」

「家庭に笑い声をたくさん届けたいんです。」

「今回のプロジェクトの商品は、家族がテーマなんです。」

「家庭に笑顔を届けるお菓子なんです。」

話しながら、興奮してくる和美だった。

なんで、この会社に入ったのか。

和美は、最初のころ抱いていた想いを思い出していた。

和美が小さい弟を連れて歩いていた時、ポケットにいつもあったのが、この会社のビスケットだったのだ。

二つに合わさったビスケットの間にクリームが挟んであって、ビスケットをはがして、クリームをこすって食べるのが好きだった。遠足のおやつでも、決められたお金の中で一番最初に迷いもなく選んだおやつだった。

牛乳に浸して食べる食べ方を教えてくれたのは、お父さんだった。

学校から家に帰ると、お母さんの「健ちゃんも仲良くしてね」と書いた手紙の上においてあったビスケットだった。和美にとって、ビスケットはどんなシーンにも出てくるアイテムだった。

和美と家族をつなぐものだった。

ビスケットは、家族に会話と笑顔を運んでくれた。

「岡本さん、僕も思い出しちゃいましたよ。」

「あんまり変わらない年代ですからね。僕たち。」

それから、和美は、プロジェクトの進捗のこと。子どもの事件の時、河合に頼ったこと。

その時、みんなが力を合わせて助けてくれたことを話した。

そして、話しながら、本来のテーマであるプロジェクトの成功のヒントが、いくつも思い浮かんできていた。

「岡本さん、本来のテーマと、ライフバランスはけっこう親密に関わっているでしょ。」

「仕事をしている部下も、他の人も全部自分の生活を持っている人間なんですよ。」

「けっこう、上司の人で、それを忘れてる人いますけどね。アハハ！」

「ところで、プロジェクトの成功の為に、今、何が必要か、何が邪魔をしているか、それを明確にしていきたいと思います。」

「成功のためにさらに必要なもの、阻害しているもの、何だと思えますか？」

和美は、星野コーチに問われて、また思考の旅に出た。

さっきの旅より、さらに希望を感じる旅だった。

「一つは、メンバー同士の関係性が薄いことです。原因は私が、彼らの表面しか見てなかったことだと思えます。」

「今回の私のことでわかったんですが、みんな仕事をしている役割の他に、たくさんの役割を持って生きていますね。」

「そんなこと考えもせませんでした。」

「もっと、メンバーの人と関心を持つようになりたいです。」

「あと、私が一人で抱えこんでいるのも、阻害要因ですね。勝手に自分で決めて悩んでいました。もっとメンバーを信頼してよかったです。」

「岡本さん、すごいね。気づいてますか？」

「今、岡本さんは、自分という主語で話しているんですよ。主体的な言葉ですね。」

「上手く行かない傾向の人は、他の第三者や外部要因を主語にして話します。」

「問題の原因を、外に向けているんですよ。」

「岡本さんは、自分にベクトルが向いています。」

「どんな人生の責任を引き寄せています。」

「大丈夫。その調子でいきましょう。」

「じゃ、具体的にこの1週間で、必ず出来る行動を決めましょう。止めること。変える事。始めること。何をしたいですか？」

「河合さんと、2人で話す時間を持ちたいです。この前、私がない時に助けてもらったお礼もして無いし、河合さんも普段の様子から、何か会社以外のことで気がかりがありそうなんです。それを訊いて、何か私や他のメンバーで役立てることが無いかな訊きたいです。」

「それ、いいですね。河合さんに何かあると感じていたんですね。感じたら動く。そこに感動あり。なんてね。」

「また、来週のセッションでの報告、楽しみにしてますね。」

和美は、星野とのセッションが終わって、しばらく会議室で頭の中を整理していた。アット言う間の1時間だった。

心からコーチと一緒にプロジェクトを楽しめそうだった。

主舞台

和美はめんバーのいる事務所に戻った。

山口の肩をたたいて、ちよつと覗き込みながら「どう？」と訊くと、「絶好調っすよ！」と元気な笑顔が返ってきた。彼は、どんなときもチームを明るくしてくれる。

その足で、河合のところによって、是非、2人で話したいことを伝えて約束を取り付けた。

自分の席に戻って和美はみんなに声をかけた。

「ちよつと、みんな聞いてくれる！このプロジェクトも半ばまできて、いろいろと問題や障害が出てきたけど、是非、みんなでのプロジェクトを成功させたいの。」

「そこで、もう一度初心に戻って、このプロジェクトを成功させてどうしたいか、何のためにこのプロジェクトを成功させたいのか、さらには、この目標をやり遂げて誰に喜んでもらいたいのか？それをみんなで考えたいの。協力してくれる？」

メンバーは、和美のテンションにちよつと戸惑いながらも、大きくうなずいていた。

「若手の深井さんと山口君で、みんなが集まれる日を調整してくれる。」

「もちろん、その後、もう一度決起を起こす泡つきの場所も選んでね。」

「がってん承知！！」

山口が笑いを誘う。いいチームだ！

和美は、初めてのリーダーシップを経験から学ぼうとしていた。

「そうだったんだ。河合さんも大変だったんだね。私たちの歳になると家族に色々あるしね。」

「この前、岡本さんが、娘さんの事を話してくれたじゃないですか。あれを聞いて、同じなんだと思っただけですよ。」

「みんな色々あって、別なところでけっこう苦労しているんだって思えて、ちよつとほつとしたんですよ。」

河合とは、同期でもあるので、2人になると普通に会話ができる事を知った。

河合は、和美と話すうちに、自分の父親が最近介護が必要になってきて、それを母親がケアすることがとても気になっていたこと。それが原因で仕事に集中できていなかったこと。

他のメンバーと話すがどうも苦手なこと。など、打ち明けていた。

和美は、自分が星野に聞かれたことによって、自分を知ることが出来たことを、そのまま同じように河合と関わっていた。コーチと話すことが、そのまま部下との会話に伝わっていた。

一つのコミュニケーションの関わりが、他者のかかわりに伝染し始めていた。

「そうね、私たちは仕事するにしても、色々な価値観があるものね。そのお互いの価値観の違いを尊重して、活かしながら、同じ目的に向かって協力していきたいの。そのために、河合さんは重要なキーマンだと思うの、お父さんのこともあるし、そんな現状で私が河合さんの為にできる事って何かしら？」

河合は、自分の事情を話せたことで、だいぶスッキリしたこと。

時々、朝、父親を施設へ送り届けるために、遅い出社にして欲しいこと。

それも、あと半月くらいで落ち着くこと。などを和美に要望していた。

和美は、チームは、同じ目的に向かって、メンバーが影響しあったり、補ったりしてそれに向かっていくものだと言っていた。お互い様なんだから。出来ることを協力すると約束していた。

「それで、河合さん。ちょっと言うのに勇気がいるんだけど、せっかくここまで話せたので言ってもいい？」

「河合さん、いつも他の人もあまり話さないで、自分の仕事に取り組んでいるでしょ。表情もあまり変わらないから、ちょっと、何を考えているかわからないのね。わからないとすぐ不安になるときがあるのよ。嫌われているんじゃないかと思うこともあるの。本当はどうなのか、教えてくれない？」

和美は、河合との信頼が結ばれたのを感じて、勇気を出して率直に関わろうとした。

感じたままを率直に伝えるには、勇気と決断が要った。

「岡本さん、それは誤解ですよ。そんな風に感じてるんだ。僕は、どうも自分の事を話すのが苦手で、物事を始めると完璧にしないと気がすまないたちなんです。だから、目の前のことに没頭しちゃう性質なんです。それが取っ付きにくい感じに受け取られちゃうんです。いつも。」

「そうなんだ、人って色々と特性があるのよね。」

「私なんか正直、完璧よりみんなが楽しくやっているかどうか、チームのムードが明るいかな、暗いかなんていうのが気になっちゃ

うのよ。」

「あっ、これはここだけの話ね。河合さんだから話すけどね。」

「この勝手に思い込むのも、私のブレーキなんだけど。そんなこともわかってきたの。」

「プロジェクトリーダーって、大変ですよ。個性的なチームのみんなをまとめていかにくちやいけないから。」

「それが、私の役割だから、でも、おかげで成長させてもらってます。」

2人は、それまで封印していた自然な笑顔を向け合っていた。

河合は和美がなんか軽くなったと感じていた。

「それで、河合さんにも是非、協力してもらいたいの。」

「河合さんの、強みを活かしてチームに貢献してもらいたいの、河合さんは何が得意？どのように貢献してもらえる？」

2人で話を始めて、あっと言う間に1時間が過ぎていた。河合は、自分はリーダーをまとめたり、アンケート結果を分析したりするのが得意だといった。その強みは、和美にも元気な山口にも無いものだった。

人は自分にあって相手に無いものを求める。

自分ができる事を相手が出来ない、不満を抱く。

自分の物差しで周りのすべてを測ろうとする。

相手の視点から見たら、相手も同じように思っている。ならばそれは、一向に満たされることは無い。

そんな浪費をどれだけしてきたらどうか。

自分は自分。人は人。

誰一人として同じ強みや特性を持った人はいない。同じ物語をつづった人間は、歴史上自分ひとりなのだ。

つまり、違いが価値だということを、和美は気づき始めていた。

自分の物差し、相手の物差し、お互いの共通の物差し、チームに共通の物差し、家族に共通の物差し、和美は大きく視点が広がる経験をしていた。

リーダーとして色々な角度から物事を見る客観性が磨かれたいた。

「岡本さん、こんにちは、暑くなりましたね。体調はいかがですか？」

星野との、コーチングセッションもだいぶなれて、和美はセッションの前に星野コーチに言われたように、10分くらい一人の時間をもって、前回のセッションから今日までを振り返っていた。

星野からは、人は必ず成長している。どんな些細なことでもいいので、成果に光を当てて欲しいと言われていた。人は自分を過小評価する傾向がある。

「岡本さん、この1週間、どんな成果を手に入れました？」

不思議だった。

問われると、そのことを無意識で考える。

質問ってすごい力を持っていると感心しながら、和美は河合との面談のこと。

みんなプロジェクトの目的を話し合ったこと。

自分が思っている以上にみんな仕事に情熱を持っているということがわかったこと。

みんな違いがあるってすばらしいと思ったこと。

ミーティングの後の飲み会で、もっとみんなに役割を任せて欲しいと叱られたこと。

セッション前に準備しておいたことを星野に話した。

こうやって整理してみると、けっこうがんばっている自分を、ちょっと誉めてあげたい気になった。

この気持ち、星野が言っていた自分を肯定する感覚なんだろうと思った。

星野は、あいづちを打ったり、感嘆の声を上げたり、「それは、コミュニケーションスタイルの違いですね」とか「チームとグループの違いですね」とか「チームが足し算から掛け算に変わろうとしますよ」といった解説をしてくれる。どんどん、和美の周りで、色々なことが輪郭を鮮明していくのがわかった。